

「汚いぞッ！ 子供供を罠に使うなど……ッ！  
貴様ら恥を知れッ！」

彼女の名は「ニコニコ」、氷魔法使いの魔女として、  
人類支配を企む魔王軍と戦う有名な魔女のひとりだ。  
そんな彼女は「魔女狩り」のために仕組まれた罠にかかり、  
こうして魔王軍の捕虜となっていた。

「なんとも言えぬ魔女め。そんなことより  
お前自身の命の心配をしたらどうだ？  
お前の態度次第では……、  
生かしてやつてもいいぞッ！」

「貴様ら、一体何が望みだッ！」

「まずはお前の態度とやうを示してもらおう。  
そうだな……、お前のその孕み袋の  
入り口を見せてもらおうか」

「クッ、こおんの、下種野郎どもめッ！」

（魔女としてなんたる屈辱ッ……！！  
でもいいわ、どうせこの後全員魔法で氷漬けにしてやるんだから  
せいぜい最期にアソコでも眺めて下種に笑って——）



ズルッ、ズルルルルルルウッ!

「ぎ、貴様何をしたッ!?」

あ、ああああアソコの中がア!  
グチャグチャに、か、かき回されてえ——!

ズブッ、ズブズブズブズブッ!

「ど、どどんおく、奥にッ! 入っているッ!」



「敵ながら素晴らしい魔力の持ち主だ。  
その素質、是非とも我が魔王軍の進撃に  
活用させてもらおうではないか!」

「ぎ、貴様ああああ!  
こ、こんなことをしてええ、ただで——!」

「オッ、オッオッオッ」

「ひびくからからウツ……」

「な、なにこれエー？」

「わ、私のお腹が、ふ、膨らんでエツ!!」

「や、やめてツ!!」

「おな、おなかがあツツツツ!!」

「オッオッ」

「オッオッオッオッオッオッオッ」

「ら、らめえええツ♡」

「ま、魔力がドンドンお、お胎こら♡」

「も、もしかしてこれえ、」

「おなかの中のば、バケモノに♡」

「ま、魔力が……き、共鳴してゐるの……？」

「やメツ、これ以上はやめでえええツ♡」

「お、お胎があああツ!!」

「ア、アヘエエツ♡」

「は、破裂するうううツ!!!!」



「ハハハハツ!!」

「いい顔だ、早くも触手の即効性媚毒ホルモンが効いてきたか。」

「我が魔王軍兵士の強靭化に欠かせない『強化用触手』を養殖する苗床、それが素晴らしい魔力に満ち満ちたお前のこれからの役目だツ!!」



「よし、これで立派な閉じないガバマンコになったな、あとはコイツを——」

掌の中から取り出された鈍い銀色の光を放つピアスの口を開け、大きく広げられた淫裂へ近づけていく。

バチンッ!

『ギョッギョッギョッ』

バチンッ!

『ギョッギョッギョッ』

「き、貴様今度は何を——」

「なに、簡単なことだ。」

今そのガバマンコと勃起クリトリリスに取り付けたこの私特製耐魔力封殺ピアスの力で、お前自慢の氷魔法、そのうちの攻撃魔法をまずは封印させてもらったのさッ! まあ、そんなものの事なんて、触手を孕んだ快楽で忘れてしまっていたようだがなッ!

「クッ……、クソオオオオ……! このド変態外道めッ!」





「君のその素晴らしき水魔術のスキルを強化用触手に継承させるためには、とてもアナルだけでは器が足りないな。ほう、その大きな乳袋が、まだ空いていたなあ……ッ！」

何本もの触手がさらに放たれた。その触手のひとつの先端が包皮のようにずりりと剥け、その中から現れた亀頭のような器官の先端から針が飛び出す。

うしゅるっ、うしゅるっうしゅるっ！

「やめッ♡ や、やめろッ！  
もう、もうこれ以上何かされたらあ♡  
私、わたしは……  
こんのッ♡ なのッ♡  
触手ッ♡  
は、はなれ——」

——アッ♡♡

「ひぐううッ♡！ち、乳首にいな、何かがああああッ♡」

乳首に突き立てられた触手の針から注ぎ込まれる触手を濡らす体液とは比べ物にならないほどの濃度の即効性の媚毒ホルモンが、じわじわと乳腺の中へと浸透していく。

「おおッ♡ お、おっぼいのなか、中がああああッ♡  
あつ、アツくてええ♡だ、ダメなの♡♡  
おおッ♡ おっぼいでえ♡ い、イギそつううううう♡」

「おおおおッ♡ おっぼいだけじゃないうううッ♡  
お、お胎もッ！ダメッ……！  
いや、イヤなの♡いッ！ お胎もアツくてええッ♡  
な、何かが膨らんでえ♡ い、イギッ！」







最初に触手を孕まされてからもう何度目になるだろうか。「養殖」の儀式の時間を迎えPrimaは前もって挿入されていた器具によって強引に拡げられたマンコに手を添えこちらを振り向き見上げる。

(ああ、はやく挿れてっ♡  
触手を……っ♡)

ハッ!?

ダメ、ダメ、ダメよ今のままじゃ、今のままじゃ私は——！  
負けちゃダメっ！  
負けちゃ……っ！  
でも——

「く、悔しいけどっ、

しよ、触手で弄られまくってえっ♡  
お、おっぱいが大きくなればなるほどおっ♡  
は、孕みたくなくて仕方がないわっ♡

お、おねがいます……っ♡  
は、早く触手をぶち込んでちょうだいっ♡」



「ハハハッ！  
最初にこの部屋の床に転がした時からすれば  
ずいぶん変わったじゃないかッ！  
しかし、これはこちらにとつては好都合。  
さあ、お前の望みどおりに  
日もしつかりと孕ませてやろうッ！」

ズルッ、ズルズルズルッ！

湿り気を帯びた蠕動音が響き渡り、  
最初の頃とは比べ物にならないほどに  
広がったマンコの中へ、  
触手がズルズルと大量に殺到していく。

「ああああんッ♡♡

し、触手が以前よりも、  
は、入りやすくなつてええええええッ♡  
だ、ダメなのこい♡  
し、触手でズボズボされるのおおお♡

んぎもちいいのうッ♡」

「だ、だめえええッ♡  
こ、こんな触手なんて、  
ふ、ふやしちやダメ……、  
ダメなの♡♡♡♡♡  
でも……、ギモヂイイッ♡

ギモヂイイよおおおおおッ♡

触手を孕めば孕むほど……、  
わたしきもちよくなっちやうのおおおおッ♡

ポロポロッ  
ポロポロッ  
ポロポロッ  
ポロポロッ  
ポロポロッ  
ポロポロッ  
ポロポロッ  
ポロポロッ  
ポロポロッ  
ポロポロッ

「わ、わたしの魔力でえッ♡  
しよ、触手がど、どんどんんんんッ♡  
ふ、ふえて……、  
孕んでいくうううううッ♡

しよ、触手孕んでええええ♡  
触手様でお胎膨らんでえええ♡

らめえええッ♡

ギモヂイイイイイイイ♡

「まだ苗床になりきることに抵抗があるようだが、  
これだけ孕むことでアへれることはいい兆候だ。  
しかし……、

このまま孕ませ続けてもいいが  
たまには違うことを試してみるか……」







「もっどおおおおおおッ♡♡♡  
もっどぎもぢいじいじいちようらいじいじい♡♡♡  
ああああいじいじいじい♡♡♡  
ぎ、ぎもぢいじいじいどんどんくるうううッ♡♡♡  
あああッ♡  
し、触手様がくちにあがってえ——、  
ん、んげええええええッ♡♡♡！」

彼女の言葉を遮り、  
食道を駆け上がった触手が口を押し広げ、  
あふれ出していく。

次々と孕む触手を覆う粘液が放つ  
即効性の媚毒ホルモンが体内にどンドン送り込まれ、  
これまで以上に全身を走る快楽によって  
媚毒の効果が促進され、  
さらに快楽を身体に与えるループに陥っていく。

(あああッ♡♡♡  
ぎもぢいじいじい♡♡♡  
触手様のママになるの本当にきもぢい♡♡♡  
もう、もうわたし戻れない♡♡♡  
もう触手様のママやめられない♡♡♡)

「それにしてもなんとという苗床の素質の持ち主だ、予想をはるかに上回る勢いで触手が育つていく。しかし……、

どんどんと繁殖していくのはありがたいが、あまりに早く苗床から零れ落ちてしまうと触手の育ちに悪いな」

(ぎもちいいいいいッ♡♡♡  
マンコで、お腹で、触手様を孕んでぎもちいいいいいッ♡♡♡  
もつと、もつとぎもちいいいいいをちようらいいいッ♡♡♡  
ぎもちいいいいいのためなら、  
そのためならなんだってするわッ♡  
だから、おねがいいいいいいいッ♡♡)

「なんだ、その物欲しそうな卑しいその目はッ！  
もつと身体をいじり倒して欲しいってかッ！  
そうか、ならいいだろう、  
お前の苗床としての望み、  
叶えてやろうッ！」



「ひとまず触手が零れ落ちないように、そのアナルを拡張して袋のようにしてやるうッ！」  
触手使役魔術によって操られた触手が蠢き、直後ムクムクとアナルが肥大化し、まるで筒のような形に変貌を遂げ、ぞろぞろとその尻穴からあふれ出していく。

「ただ肛門を肥大化させるだけじゃダメだな、それなら」

命じられた触手の力で脱肛したアナルの形が変化を遂げ、背中縛られる形となった腕を通す穴が開き、そこでその巨大化したアナルが固定される。

「よし、これでアナルで増えた触手も少しは長く苗床で育てられる。実に醜くて、実に面白い姿だッ！」





「ほら見てええええッ♡  
私のマンコこんなに穴からはみ出ちゃつてええええええッ♡  
アナルの孕み袋みたいに足で広げればあ♡  
ほらあ、  
もーっとたくさん触手様を  
孕んでられるわああッ♡」

クリチンポ化改造による快楽人格破壊の後も  
幾度となく触手を孕まされ続け、  
その度に触手が苗床から零れ落ちないよう  
魔術による人体改造がエスレートしていく。

その結果脱肛拡張だけでは飽き足らず、  
とうとう子宮までもが拡張されてしまい、  
アナルとマンコ双方から  
巨大な赤黒いものが飛び出す有様となっていた。

「おねがあああッ♡  
今日も早く私の  
このクソデカ子宮脱マンコとおおおおッ♡  
脱肛孕み袋の中に触手様をぶち込んでええッ♡  
今日もお、  
気が狂うまで孕ませてええええええッ♡」









「ん、んげえええええええッ♡♡♡」

アナルで無限に生まれ続ける触手が行き場を求め、今日も彼女の口を強引に押し広げ、チビチと暴れながら姿を現す。その身体の大半を腕より太い触手が取り巻き、醜く変形した身体はひと目では人間とは認められない有様だった。

↑きもちいッ♡  
身体中がうねうねいっばいできもちいッ♡♡♡  
おねがい♡  
おねがいわたりしいとしい触手ちゃんたち♡  
この「ママ」の穴という穴をお♡  
そのたくましい御体でええええええッ♡  
孕ませ尽くしてええええええッ♡

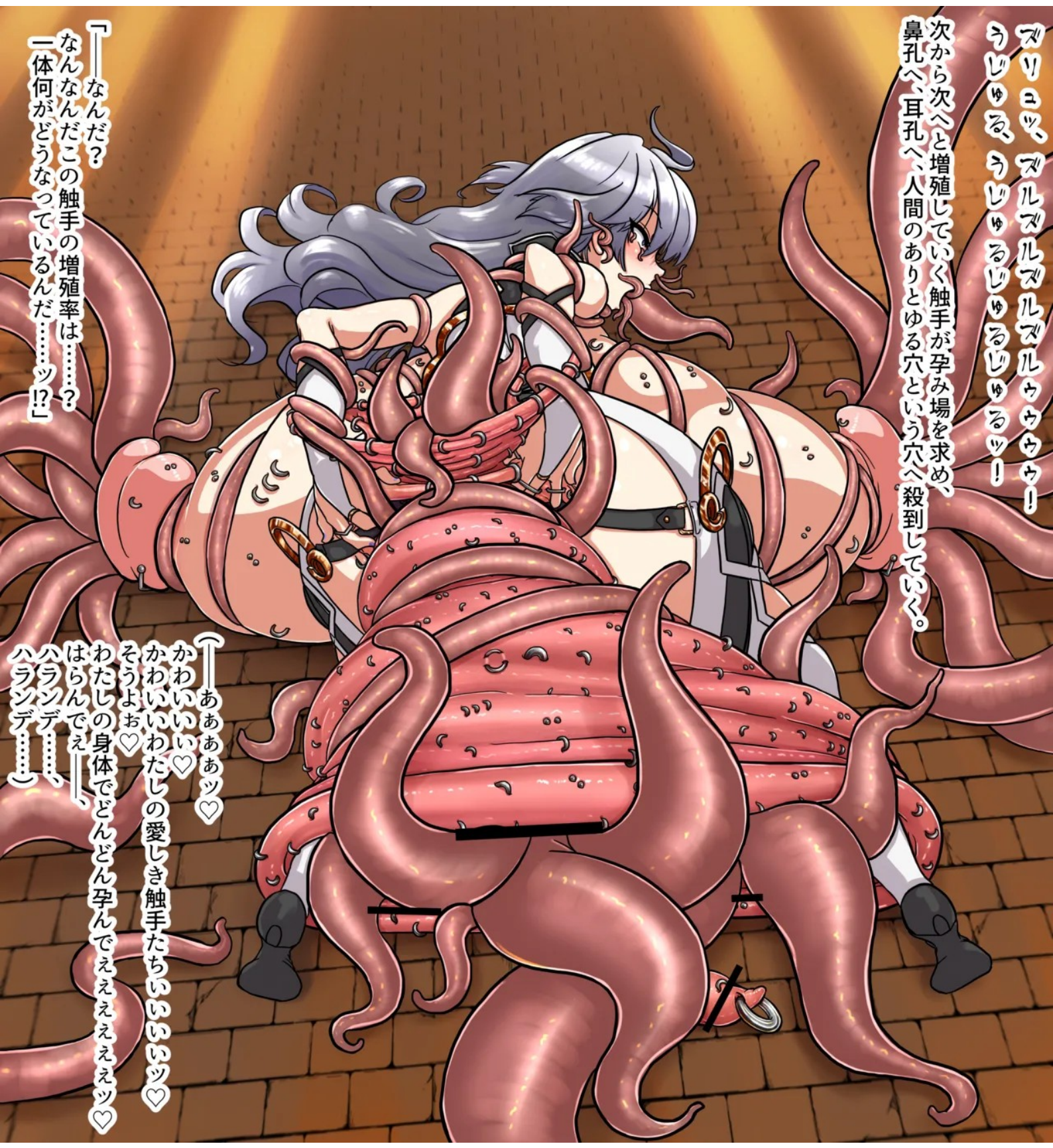


ズリョツ、ズルズルズルズルウウウウー！  
うじゅる、うじゅるじゅるじゅるじゅるッ！

次から次へと増殖していく触手が孕み場を求め、  
鼻孔へ、耳孔へ、人間のありとゆる穴という穴へ殺到していく。

「なんだ？  
なんなんだこの触手の増殖率は……？  
一体何がどうなっているんだ……ッ!?」

「ああああッ♡  
かわいい♡  
かわいいわたしの愛しき触手たち♡♡♡♡♡  
そうよ♡  
わたしの身体でどんどん孕んでええええええッ♡  
はらんでえ♡  
ハラッデ♡  
ハラッデ♡  
ハラッデ♡」







ビチッ、ビチビチビチッ！  
ビチビチッ、ビチッ……！！

「ようやく触手の動きが止まったか。魔術レベルの高い苗床が快楽を無制限に貪るようになるの恐ろしい。まさか自我まで触手に移そうとするとは……、これは初めての事例だな」

力を失った触手の二部が力なくだらりと垂れ下がり、触手に覆われていた相貌が姿を現した。完全に石化したその相貌は虚空を見つめたまま微動だにすることはなかった。

「さて、この苗床と暴走した触手の処分を済ませたら、早いところ新しい苗床を見つけなければならぬな。魔術強化用触手の大量生産は魔王様のご意向、一刻も早く、兵士に新たな苗床の捕獲を指示することとしよう」























































